

「36度5分」か「36.5度」か

暑い日が続いている。ここ数年、夏の時期の暑さは異常だ。それは気象用語からも見てとれる。たとえば、2007年に「気象用語」に「猛暑日」（1日の最高気温が35度以上の日）が加えられた。「夏日」「真夏日」「熱帯夜」から「酷暑」「猛暑日」と暑さの表現がだんだんと激しくなっているように感じる。今年は節電の影響で、ニュースで暑さの情報を伝えることが多い。毎日の気温を注意して聞くようになってきている人も多いだろう。先日、NHKの気温の言い方と民放の気温の言い方が違うのはどうしてか、という質問を受けた。確かに、NHKと民放では気温の読み方が異なる。NHKは、気温の言い方を読みと表記で分けている。読みは「〇ド〇ブ」、表記は「〇. 〇度」である。一方、民放は、「〇テン〇ド」と読み、表記も読みのおり「〇. 〇度」とするところが多い。

NHKの資料で「気温の読み」についての記述が出てくるのは、昭和29年の部内資料『放送気象用語集』からである。「気温“〇度〇分(ブ)”」「〇. 〇度(〇点〇度)とは使わない」とある。これ以降、現在の『NHK気象・災害ハンドブック』(平17)まで「気温の読み」についてのNHKの決まりは変更されていない。表記については、明記されているものがない。しかし、テレビ画面に書ける字数が限られており、記号や単位などを

略記することが認められている。そのため、表記は「〇. 〇度」または「〇. 〇℃」となるわけだ。

NHKで2000年に「気温の読み」についての世論調査を行った。自分が気温を言うとき「23ド4ブ」と言うか、「23テン4ド」と言うかを聞いた。この結果、「23ド4ブ」は60%、「23テン4ド」は39%であった。「〇ド〇ブ」が多い結果だったが、年代による差があり、20代、30代の若い年代は「23テン4ド」を選ぶ人が多かった。NHKが気温の読みを「〇テン〇ド」にしないのは、「〇ド〇ブ」のほうが耳で聞いたときにわかりやすいからである。また、「〇テン〇ド」が略した言い方だからでもある。音声を主体としている放送メディアでは、字幕での略記は認めるが、音声ではできるだけ略さずに正式な言い方を使う。

最近「〇ド〇ブ」は「体温」を示しているようで違和感があるという声も聞かれる。夏の暑さが異常になってきた2000年以降、「36.5度」などの気温の日もある。これを「36ド5ブ」と読むとまるで体温のように聞こえるというのだ。前述のように気温の読みは昭和29年から変わりなく使われている。表現を検討してもいい時期なのかもしれない。気温について耳で聞いてわかりやすい表現はどれなのか、「あつく」議論し、検討したい課題である。 山下洋子(やましたようこ)